慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パラケルススのメルジーネ論 : 水の精の魂はいつ宿ったのか?=いつ失われたのか?
Sub Title	Zu Melusine-Vorstellungen bei Paracelsus
Author	清水, 恵(Shimizu, Megumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2003
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.85, (2003. 12) ,p.218(35)- 240(13)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00850001-0240

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パラケルスス のメルジーネ論

―― 水の精の魂はいつ宿ったのか？＝いつ失われたのか？ ――

清水　恵

0．はじめに

Es muß etwas Liebes, aber auch etwas höchst Furchtbares um eine Seele sein. … Schwer muß die Seele lasten, … sehr schwer! Denn schon ihr annahendes Bild überschattet mich mit Angst und Trauer. Und ach, ich war so leicht, so lustig sonst![1]

（魂って可愛いものらしいのね。でもまた、何かとても恐ろしいものに違いないわ。…魂って重い荷物に違いないわ。とても重いものに違いないわ。だって、そのかたちが近づいて来るだけでも、もう私には居ても立ってもいられないような心配や悲しみが影のように覆いかぶさって来るんですもの。いつもはあんなに軽い、楽しい気持でいられたのに。）[2]

ドイツ・ロマン派の作家 Friedrich de la Motte Fouqué『ウンディーネ』（1811 年）からの上記の引用は、水の精ウンディーネが、人間の騎士と結婚した後にはじめて魂を得る場面で語った言葉である。この作品が書かれた 19 世紀前半の時代は、水の精、すなわち精霊（Elementarwesen）は魂（Seele）をもっていないということが、通説になっていた。水の精は人間との婚姻によって初めて、魂を得ることが出来るのである。言い換えれば、水の精は人間と結婚して魂を得ることによって、人間と同じように神の子

として死ぬことが出来る存在になる、ということである。しかし、周知のようにウンディーネは、夫の裏切りに遭い、魂を救われたいという望みは叶わない。水の精は人間界から締め出されるのである。

ここで注目したいのは、ウンディーネがそもそも魂を持っていなかったということが、はっきりと示されている点である。魂を持たないウンディーネは心から楽しい気分でいられたのであった。それが、人間と結婚し魂を得ることによって、居ても立ってもいられないような心配や悲しみが覆いかぶさってくる。魂はそれだけ重いものなのだ。そして、魂を得たウンディーネは、自分の水の精としての素性を、夫に自ら打ち明けてしまうのである。

それに対し、時代を遡って 1456 年に Thüring von Ringoltingen によって書かれた水の精メルジーネの物語[3]では、人間との婚姻によって魂を得るというモチーフはまったく描かれていない。彼女は、自分がキリスト教徒であることを繰り返し告げることで騎士ライモントを安心させ、自分が水の精であることは一切明かさない。彼女が自分の魂について触れるのは、夫がタブーを犯して彼女の素性を明かしてしまった後のことである。それは、以下のように語られる。

> …den ob du mir gehalten und din gelüpte geleist hettest uffrecht und fromlich, so wer ich natürlichen by dir gewesen und beliben und als ein ander natürlich wib gestorben und der erden bevolhen worden, und were myn *sele* von mynem lib gewißlich zů der ewigen fröude komen(93, 20ff.).[4]
> (正直にそして誠実に約束をお守りくださって私を留めてくださったら、私は自然にずっとあなたのお傍におられたでしょうに。そして、他の女性と同様に自然に死んで埋葬されることができ、私の**魂**は肉体から永遠の喜びへと向かうことができたでしょうに。)

メルジーネは、このようにはっきりと、自ら救済を願っている。メルジーネの望む「救済」は、人間と同じように死ぬことである。現代に伝わ

る一般的な理解では、メルジーネは本来魂を持たない Elementarwesen であったのだが、人間との婚姻により魂を得ると解釈されている。例えば Kurt Ruh は、その件に関し何の疑問も持たずに「人間と関係を持つことで彼女は魂を得る。それは言い換えると、彼女がアダム的存在に、人間と同じような存在になるということ、ただ人間と同様に生きるだけではなくて、人間と同様に死ぬということである」と述べている。(5) そして、それがメルジーネの「救済」であるというのだ。たしかに、上記の引用のように、メルジーネは魂が救われることを願っている。しかし、夫が「蛇女」と罵ったことにより、メルジーネは「救済」されることが叶わず、人間界を去らざるを得ないのである。

ところでメルジーネは、本当に人間との婚姻によってはじめて魂を得たのであろうか。上記の引用からは、それは定かではない。メルジーネ自身が sele（魂）という言葉を発していることから、彼女が魂を持っていたことは確かである。それではメルジーネは魂をいつ得たのであろうか。一般的なメルジーネ理解とは異なり、Thüring の物語のメルジーネは、すでに人間との婚姻以前に自分がキリスト教徒であることを繰り返し告げている。つまり人間との婚姻後に魂を得るというモチーフはまったく描かれていないのである。しかしそもそも、魂の無い存在がキリスト教徒になり得るだろうか。メルジーネはもともと魂を持っていたからこそ、キリスト教徒として描かれ得たのではないだろうか。Elementarwesen は魂を持たず、神の救済を求めているという認識は、いつ頃から定着したものなのだろうか。それ以前は、人々は Elementarwesen をどのような存在と認識していたのだろうか。本論文は、メルジーネ伝説という神話的モチーフがいかにキリスト教化され、異界の精がいつ魂を得たのか、もしくは、いつ魂を失ったのか、その契機について考察するものである。

1．Paracelsus のメルジーネ論

Thüring によってメルジーネの物語がドイツ語で記されたのは、先に述べたように 1456 年のことである。それから半世紀ほど後に、Paracelsus

(1493-1541) が *Liber de nymphis* [6]で水の精メルジーネについて分析している。Paracelsus によれば、メルジーネをはじめとする四つの Geistmenschen の種族、Wasserleute, Bergleute, Feuerleute および Windleute は、アダムから作られた人間種族ではなく、人間とも動物とも異なる別の被創造物であるものの、人間同様血や肉を持ち、Geist でもあり Mensch でもあるような存在である。このように Elementarwesen を人間と異界の精の中間的な存在である Geistmenschen に分類しているところが、Elementarwesen に対する Paracelsus の基本的姿勢を明確にあらわしていると言ってよいだろう。人間と異なるのは、彼ら Geistmenschen は血や肉を持ちながらも空気のように岩や壁や水などを通り抜けられること、彼らが人間同様に理性を持ち、動物同様に死すべき存在でありながらも Seele を持たないことである。一方で、キリストは Seele を持つもののために磔刑にかけられ、復活した。言い換えれば、Seele を持つものだけが神によって救済され得る。そのため Seele をもたない Geistmenschen は、死後は塵と消える運命にある。彼らが人間同様に救済されるためには、人間と婚姻を結んで Seele を得るしかない。

ところで Paracelsus が記している「メルジーネ」は、広く「水の精」という意味である。それは、Melusinen という複数形がしばしば用いられていることからも明らかである。つまり「メルジーネたち」という言葉は、水の精の種族たち、という意味レヴェルで使用されているのである。[7]

Paracelsus が *Liber de nymphis* を著した 16 世紀においては、Jean d'Arras、Couldrette および Thüring の物語を通して、メルジーネが周期的に水浴を行なう際その下半身が蛇の姿になること、その蛇の素性が人間の夫に知れたためにメルジーネは人間界から去らざるを得なかったこと、それはすなわち神によって救済される機会を失ったことを意味するということが、広く認知されていた。Paracelsus に従えば、メルジーネの蛇の尾は、彼女がもともと備えている水の神話的性質の表象ではなく、悪魔の烙印として解釈される。メルジーネは人間の夫を得るためにベエルツェブブ (Beelzebub ＝悪魔) [8]の力を借りたので、その代償に毎週土曜日に蛇の姿

にならなければならない宿命を負ったとされる。[9] この Paracelsus の解釈は、同時代人のメルジーネ表象の核を成していた水の神話的性質を、キリスト教的パラダイムのなかで再解釈しようとする試みである。

しかし一方で、Paracelsus は錬金術師としてその名を後世に残した人物である。錬金術はその時代のパラダイムの中での「科学」としての側面を持つと同時に、一種の宗教的側面も兼ね備えている。例えば、錬金術の図像が心理学的な夢と幻視に共通することに注目して *Psychologie und Alchemie* を執筆した C. G. Jung は、錬金術の神秘主義的な自己実現という要素をクローズアップした。[10] Jung によると、キリスト教が人間を「救済されるべき者」とみなしてその救済を神的形象に委ねるのに対し、錬金術の考え方は、「人間は救済する者である」というものである。つまり、救済の作業を遂行する義務は人間自身の側にあり、物質の中に囚われて悩める状態にある宇宙魂（anima mundi）[11]を人間が救済しようとする。[12] また、M. Eliade は、『鍛冶師と錬金術師』において、錬金術を古代密儀における通過儀礼として位置付けている。Eliade によれば、通過儀礼はまさに死と再生を意味する宗教的体験に他ならない。[13]

以上のような宗教的な視座に立てば、錬金術は神が人間に対して定めた規範を超える活動であり、正統的なキリスト教の知のあり方から見て、当然それは魔術としての烙印を押されるべきものである。したがって、Paracelsus の錬金術師としての側面は、キリスト教から逸脱する知の試みであったとみなし得る。その Paracelsus がメルジーネを神の秩序の中に位置づけようと試みて論を展開しているという事実は、非常に興味深いことである。正統なキリスト教の知の枠組みで解釈すれば、メルジーネの水の神話的性質に由来する不可思議な力は、逸脱そのもの、魔術そのものを表象している。しかし Paracelsus は、メルジーネの蛇の尾を悪魔との契約による烙印と解釈しながらも、魂を持たない存在であるメルジーネを人間同様に神の創造物だと明記しているのである。彼は、神がメルジーネを創造したのは、人間に神の全能さを教えるためなのだとしている。パラケルススは次のように述べている。

「だから、我々は目の前で起きている信じがたい現象を訝しく思ってはいけない。そのような現象は全て、あらゆる物事を我々の思考や理解力に倣ってではなく我々の思考や理解力を超えて我々のためにおつくりになった神によるのだから。というのも、神は神の被創造物においてまさに奇跡的な神であることを望んでおられるのだ。というのも、万が一神が、人間にして信じられるもの以外何も創造できないのだとしたら、神の力は弱きものとなり、人間と変わりないものとなってしまうだろう。だからこそ、神はいわゆる神としてそれ（精霊）をおつくりになったのであり、神の被創造物はあまりにも偉大であるからして誰もそれらについて訝しく思ってはならないのである。そのように神はお望みなのである。」[14]

ここには、科学と宗教という近世の知のパラダイムのはざまで葛藤するパラケルススの姿を垣間見ることができるだろう。

ところで Jung によると、救済を求める存在 anima mundi は、グノーシス主義において、上半身が女性の姿、下半身が蛇の姿をしたエデム（Edem）という形態で示されていた。このエデムのモチーフが錬金術においてメルクリウス[15]に転移し、メルクリウスも同様の半女半蛇の形姿で表現されるようになった。[16] Paracelsus のメルジーネは、Jung によるとこの「メルクリウスの蛇」の一変形である。[17] メルジーネは、女性の上半身を持ち、蛇の下半身を持つ存在であるが、蛇は古来より多くの文化圏の神話や祭式において男性のファロスの象徴であった。[18] また、蛇は古代より両性具有のシンボルとして、人間の力を超えた神の力、性のエネルギー・再生・豊饒を表象するものであり、さらに世界（mundus）そのものの表象でもあった。[19] そしてこのような蛇の表象する再生、豊穣、世界のすべてが、パラケルススの描くメルジーネに引き継がれているのである。この蛇女が伝統的に蛇の性質とみなされている両性具有だと考えるならば、その上半身は女性、下半身が男性の表象であり、メルジーネのとぐろを巻いた一本

だけの蛇の尾は、ファロスを表していると言えるだろう。すなわちメルジーネは、女性としての乳房を持ち、かつ男性としてのファロスをも所有する、まさにアンビヴァレントな両価値をもった呪術的二重象徴なのである。したがって Paracelsus は、とりわけ処女蛇（Schlangenjungfrau）という異形性を持つこのメルジーネをメルクリウスの蛇（serpens mercurialis）の一変形とみなし、メルクリウスのもつ本質の二重性[20]を表現する手段として応用していた可能性が高いのである。[21] つまりメルジーネは、anima mundi の救済を希求する性質を引き継いだ serpens mercurialis なのである。[22]

先に述べたように、Paracelsus によると、メルジーネは Beelzebub の力を借りて夫を得た代償に、猫や狼魚（Meerwolf）や犬などに変身できる魔女と同様の魔性性を身に備えることとなり、毎週土曜日に蛇にならなければならないという誓約を Beelzebub と結ぶ。この呪いは一生涯続くが、いつ死期が訪れるかは神のみが知る。[23] 一方で、人間と婚姻関係を結び、Seele を得ることによって、水の精（Wasserfrau）は神に救済され得る存在になる。[24] つまり、水の精メルジーネが Beelzebub の呪いを解くためには、人間である夫のもとで一生を終えることが必要であるということだ。このような Paracelsus の説は、次のように解釈できる。キリスト教的悪魔である Beelzebub の呪いを受けた魔女的存在も神による救済を求めており、また神は、悪魔と契約を結んだそのような存在をも救済する全能的存在である。このように解釈することによって、本来はキリスト教とは相容れない錬金術の「メルクリウスの蛇」が、キリスト教に救済を求める存在に変容し得るのだ。Paracelsus は錬金術としての視点から、蛇という表象を、キリスト教における善に対する単なる悪としてではなく、メルクリウス、すなわち呪術力や魔法の力を象徴するコードとしてもまた捉えていたと考えられる。人間を救済し、奇蹟をもたらすという意味では、Jung が指摘している次の説、すなわち、海の精セーナエ（Senae）の啓示力、治癒力、変身能力等とメルジーネとの関連性を指摘する説も、メルジーネの持つ超自然的な力を裏付けるものである。[25] Jung の説を信頼するならば、中世ヨーロッパにおいて表象されていたメルジーネは、奇蹟的な力を持つものとし

て人々に認識されていたことが推測できるだろう。当時は医学と同義でもあった錬金術は、当然のことながら病気や怪我の治療に応用されたのであるが、薬や治癒術とも関係のあるメルジーネはメルクリウスの表象として最適であったのではないだろうか。

以上のことから、Jean d'Arras、Couldrette および Thüring によって 14 世紀末から 15 世紀中葉にかけて描かれた蛇女としてのメルジーネは、単なる邪悪な存在ではなく、人間と結ばれることで魂の救済を願い、その代わりに人間に奇蹟をもたらす存在であったと考えられる。すなわち蛇女としてのメルジーネは、中世キリスト教において支配的であった邪悪なイメージの他に、異教的な人間の力を超えた根源的な力を持つものとして、もう一つ別の蛇のイメージを担っていた可能性が指摘できるのである。または、Elementarwesen は当時、古代ヨーロッパのアニミズム的信仰の名残を留めた存在だったと言ってもよいかもしれない。

このような根源的な力を備えたメルジーネには、Seele が備わっていなかったのだろうか。この蛇女を始祖として年代記を制作したフランス貴族は、神話的存在のメルジーネをキリスト教徒として描いたが、先に述べたように、その物語の中では Seele が欠けているというモチーフはまったく言及されていない。婚姻前からキリスト教徒だったメルジーネは、キリスト教徒であった時点で既に Seele を持っていたと考えるのが妥当であろう。それが、Paracelsus の宗教的解釈によって —— 錬金術師としての解釈はまた別であるが —— メルジーネ表象がキリスト教的な表象システムに組み入れられ、善と対立する魔女的存在に祀り上げられてしまったのである。

2．呪縛する存在としてのメルジーネ

ところで、Kurt Ruh は、論文 *Die 'Melusine' des Thüring von Ringoltingen* で、メルジーネ表象があらわしているものを"das Faszinosum"と定義している。男性を神秘的な力で呪縛する存在、それがメルジーネである。[26] U. Junk は、Ruh のその定義を受けて、中世の Thüring の物語からフォン

ターネの『シュテヒリン湖』に至るまでのメルジーネ表象には、女性性の優越と不可解性への畏怖の念が深く潜んだものであることを指摘している。Junk は女性への畏怖の念が、現実の男性優位の社会構造のもとで悪霊と結びつき、男性への呪縛とみなされるようになったと説明している。(27)

しかし Thüring のメルジーネの物語では、悪霊と結びついているはずのメルジーネが大いに擬人化（Personifikation）されて、ときには人間以上にあたたかい人間性を備えた人物像で描かれている。メルジーネとその夫となる人間の騎士ライモントとの出会いの場面ではたしかに、その場が渇きの泉（Drustbrunnen）や三人の女性の登場といったメルヘン的な要素で描かれ、メルジーネは初めて出会った彼の名前や出来事をあらかじめ知っており、超自然的な力で彼の将来の繁栄と栄華を約束・実現するなど、メルジーネの魔術性が明確である。しかし、先に述べたように、メルジーネは自分がキリスト教徒であることを強調し、幽霊（Gespenst）ではないかという人間側の疑念を拭い去っている。また、ライモントが土曜日にメルジーネの篭っている部屋に穴を開けて覗き見し、彼女の蛇女の素性を知り、恐れおののいているときにも、元の姿に戻ったメルジーネはいつもと変わりなくやさしく夫を愛する。このように、Thüring のメルジーネ描写においては Elementarwesen としての霊性が後景化されており、彼女の人間的側面が前景化されている。そしてその擬人化は、メルジーネの本来の性質（＝蛇女の性質）が公に暴露されたときにこそ頂点を極め、タブーを破った夫の家系の安泰を図るために、息子の一人を殺害することさえ指示するのである。さらに、人間界を去った後も、乳飲み子の世話のために戻ってくる。このような擬人化、すなわち人間的側面の前景化をどのように解釈するべきなのであろうか。

Junk は、中世における神話モチーフの文学作品への翻案は、一般に次のような段階を経て行なわれると述べている。それは、Dämonisierung des weiblichen Partners（婚姻の相手である女性の悪霊化）、Funktionalisierung seiner magischen Dominanz（女性の魔術的優性の機能化）、Aufhebung der Dämonisierung in der Idealisierung（理想化における悪霊性の止揚）の三段階で

ある。これは中世の現実社会の心的かつ社会的構成要素の文学的変容の過程を反映したものだという。この三段階説を援用するならば、Jean d'Arras、Couldrette および Thüring のメルジーネの物語は、この三段階によって神話モチーフが完全に物語化された上に、様々なモチーフの連続を関連させて読み応えあるものに構成し直されたもの、ということになる。そうであるならば、この物語は神話をただ書きとめようとしたものではなく、作者によってなんらかの意図を持ってその意図を伝えるために再構成されたものであることを意味する。つまりメルジーネの物語は、メッセージ性を備えているはずなのである。この Junk の説に従うと、リュジニャン家の始祖である女性が何かの意図で悪霊化され、それがさらに機能化（さまざまな魔術的力の応用による家門の繁栄など）され、擬人的理想化のなかで悪霊性が止揚されたということになる。このようなメルジーネの擬人化には、どのような意味が込められているのだろうか。また、どのような心的・社会的背景が反映されているのであろうか。

リュジニャン家という貴族の家系の繁栄と幸運は、事故とはいえ伯父の殺害とその隠蔽の上に成り立っている。伯父の殺害は星位が予め示しており、その隠蔽はメルジーネの不可思議な力に因るものだ。人間の力を超えたこれらの出来事は、中世社会の人々のヌミノーゼ的存在に対する畏怖の念が言語化されたものであるが、キリスト教の神の定めた運命に逆らい、伯父の殺害という罪を償うことなくメルジーネと「契約」して繁栄を得ることは、キリスト教的秩序に反する行為である。そのような繁栄は、神が許すものではない。

また、次のような見方をすることも可能である。すなわちメルジーネの物語とは、異なる秩序との出会いと交合の試みを描いたものである、という見方である。水の精は、水の支配する自然の秩序、もしくは妖精の属する神話的世界の秩序を人間世界の秩序へ持ち込み、優先させる。その際、人間側には Sehtabu すなわち「見るな」というタブーに代表されるなんらかのタブーが課される。そのタブーを遵守する限り人間には幸福が約束されるが、一度タブーを犯すと水の精を失うのみならず、その人間や属する

社会は没落する運命にある。したがって、水の支配する自然の秩序の方が、人間世界の秩序より高次の存在であるとみなすことができる。[28] しかし、水の精が悪魔と契約し、さらにそのような悪霊的存在と人間とが契約したと解釈すると、話は別になる。反キリスト的秩序を体現する悪魔と自然秩序を支配する非キリスト教的水の精との契約は、正統派キリスト教の立場から見れば、最も高次の神の世界秩序を脅かすものにほかならない。水の精は、キリスト教的神の世界秩序によって、水の精が本来持っていた自然秩序を支配する高次の性格を魔性性に置き換えられ、魂を持たない人間に劣る存在へと貶められ、キリスト教的秩序の支配する人間社会から追い払われる。そして、そのような悪霊的存在と契約した人間にも、神によって罰が下されねばならない。そのため、リュジニャン家は没落する運命にあるのである。

一方メルジーネは、人間の夫ライモントとの間に 10 人の息子を儲ける。子供たちは、三つ目や獣の耳や蹄を持つなど、それぞれ身体的に異界の性質を備えており、異界の精であるメルジーネの血族であることは明白である。さらに息子たちは武勇に優れ、異教徒や怪物との戦いに苦しむ国を救ってその国の姫君と結婚することなどを通してリュジニャン家の勢力範囲を広げるなど、活発な活動を展開する。特に大牙を持つゲフロイの攻撃性は群を抜いており、例えばマリエール修道院を焼き討ちして実の弟を含む修道僧たちを殺害してしまう。その際彼は、修道士を„Die schamlichen bösen münch“（恥知らずな悪僧たち）、„Ir unseligen münch“（呪わしい修道僧たちよ）と罵っている。[29] それは、メルジーネがキリスト教徒として救済を強く望んでいることと対照的な行為である。それを聞いたライモントは、そのようなゲフロイの異常性は、蛇女メルジーネの血を引く所為だと断定するのである。彼は、メルジーネとの結婚を„ein gespönst wib“（妖怪）との結婚だと後悔し、メルジーネを„du böse schlang, du schamlicher wurm“（悪しき蛇よ、恥ずべき蛇よ）と罵った上で、ゲフロイを„din sůn Geffroy mit dem grossen zan“（お前の息子の大牙のゲフロイ）としてその悪行の原因を母から受け継いだ非キリスト教的な異界性に求めている。[30] た

しかに、ゲフロイはメルジーネの父親が治めていたアーヴァロンへ旅をし、自らの出自に関する情報、すなわちメルジーネの母親プレジーネが妖精で人間の夫ヘルマス王との間に三人の娘を儲けたことや、メルジーネたちにかけられた呪い――メルジーネが毎週土曜日に蛇の姿になるのは、パラケルススの述べているように Beelzebub と契約を結んだからではなく、Thüring の物語によれば、父ヘルマス王をアーヴァロンの山中に幽閉した罪に対して母親プレジーネがかけた呪いのせいである。プレジーネは他の娘たちにも呪いをかけており、三人の娘たちはそれぞれ異界の血を引く宿命を背負っている――についてなどの情報を得ることから、彼がメルジーネの異界性を最も色濃く引き継いでいることは明らかである。Thüring は、蛇女メルジーネをキリスト教徒として擬人化し人間の貴婦人の鏡であるかのように描く一方で、これと対照的に息子たちの身体的異常性・並外れた武勇・悪霊性を対極的に描くことで、異界の精の妖怪的性質を物語っているのである。すなわち Thüring は擬人化されたメルジーネの描写とメルジーネの血が引き起こす異界性の強調によって、メルジーヌのなかに魂をもったキリスト教徒と異界の精としての存在がなんの問題もなく並存することを明確に示しているのである。

メルジーネの異界性は彼女の蛇の尾で表象されているが、先に述べたように、蛇の尾は男性性を示してもいる。女性性と男性性を兼ね備え、人間の貴婦人の鏡でもありかつ蛇女でもあるメルジーネは、したがって、その存在そのものが二律背反的な存在である。Thüring 等による物語記述上のメルジーネの貴婦人としての擬人化は、人間の王族ヘルマス王の血を引くことと、先に述べた Junk による神話モチーフの文学作品化の最終段階（理想化における悪霊性の止揚）と結びついて強調され、それによってメルジーネの蛇性が隠蔽されている。このような擬人化の前景化と蛇性の後景化によって、メルジーネの二律背反性が一層際立っている。また、彼女の蛇の尾が本来持つ男性性は、専ら息子たちの武勇談で描かれる。息子たちの武勇や身体的異常生誕は、人間界の英雄の象徴でもあり、人間の王族、ヘルマス王の血を引くことが明らかである。しかしその武勇が限度を超え、

キリスト教的社会を脅かす行動にまで発展しているゲフロイの修道院の焼き討ちは、王族の血族としての男性性のみならず、異界性をも現わすものである。したがって以上のような息子に関する記述からは――異界の精への畏敬の念はもちろんのこと――男性は女性的悪霊に魅惑され呪縛されるものであると考える中世人の心性が垣間見れるのである。

蛇女メルジーネの素性が明かされ、彼女が人間界を去った後、夫ライモントはローマへ巡礼の旅に出て、さらにモンセラートで隠遁生活に入る。このような禁欲生活によって、魔性の存在と契約を結んだ人間ライモントの罪は償われ、救済される。その代わり、ライモントと、さらに遡ってヘルマス王の犯した罪、すなわち魔性の存在と婚姻関係を結んだ罪は、リュジニャン家の末裔の「ハイタカの冒険」で罰せられる。メルジーネの姉の一人メリオールが負った宿命は、アルメニアの山頂の堅城にて妖怪となってハイタカを飼うことである。リュジニャン家の騎士が三日三晩ハイタカの寝ずの番をすることに成功したら、なんでも望みのものを恩賞を与えることになっている。しかし、メリオール自身を恩賞に求めることは出来ない。異界の精との婚姻は、固く禁止されているのである。それにもかかわらず、アルメニアからやってきたリュジニャン家ゆかりの騎士は、メリオールを恩賞に求める。彼女は、美しい貴婦人の姿で現れるが、恩賞として求められるや否や妖怪に急変する。異界の性のアンビヴァレント性が明確である。そして、この性的タブーを犯した騎士は、罰せられて瀕死の重傷を負い、家系も途絶えてしまうのである。これをもって、キリスト教社会の秩序が完全に修復され、キリスト教的道徳規範の要求は満たされる。メルジーネのもう一人の姉、プランティーネは、アラグン国のコムチュという山で、父ヘルマス王の宝を守るという宿命を負う。彼女は、リュジニャン家一族の者が力をもってその山と宝を手に入れ、その宝で神聖なる墓とエルサレムを手に入れるまで、父王の宝を守らねばならない。言い換えれば、ヘルマス王の宝は、リュジニャン家ゆかりの者でなければ手に入れることができないということだ。Thüring の物語では、イギリスの騎士がその宝を手に入れようとして身を滅ぼしたエピソードが語られている。

その知らせを聞いたゲフロイがその宝を手に入れるために遠征しようと考えたが、出発直前に病に倒れ、リュジニャン家はその宝を手に入れる機会を失ってしまった。すなわちリュジニャン家は、人間界からの遺産を引き継ぐことはできず、異界の呪いを受けて滅びる運命にあるのである。再度言い換えれば、人間の王族の血と異界の蛇の血を引くリュジニャン家は最終的に、人間の王族としての父方の宝を手に入れることはできず、蛇族の母方の血しか受け継がれなかった、ということだ。リュジニャン家の急速な勃興とその悲惨な没落の原因を、非キリスト教的な悪霊の呪縛とみなしているこのプランティーネの宿命とゲフロイのエピソードにも、女性の悪霊性に対する中世社会の畏怖と恐れが表現されているといえるだろう。以上のように女性の悪霊性は呪縛するものとして、貴族の家運を左右すると考えられていたのである。

3．魂はいつ失われたのか

以上のように、異界の精に関する神話的モチーフが女性への畏怖の念と結びつき、Jean d'Arras、Couldrette および Thüring によって相次いで物語化され、異界の精の呪縛性が広く人々の間に広まった。その後まもなく Paracelsus によって先に述べたメルジーネ論が書かれたということを、本論の最後に再度考えてみたい。

Paracelsus が活躍していた時代は、ある種の女性論争が行なわれた時代である。それは、一方ではスコラ哲学と古代哲学を用いた人文主義者の視点で、もう一方では超自然的な科学と当時広く広まってきていた魔女に対する社会的拒否反応現象とを反映して、論争が行なわれていた。16 世紀前半、すなわち Paracelsus が *Liber de Nymphis* を著作した時期は、ヨーロッパ社会において魔女に関わるパラダイムが大きく変化した時代でもある。すなわち呪文を唱え、チンキ剤を作るという魔女像から、悪魔を崇拝し、悪魔と性的に倒錯した方法で結合する女性という魔女像へと変わったのだ。(31) その時代にあって Paracelsus は、魔女や異界の精など超自然的な現象を、当時の知のパラダイムの範囲内という制限の中でではあるが、科

学的・学問的に説明しようと試みたのであった。そのような一種の科学的な視座に立った彼であったが、この世には„Unnatürliches“（非自然的なもの、反自然的なもの）は何一つ無いとし、その理由として、この世の全ての現象・あらゆる存在が神の創造物、神の„Kunst“なのであるからだ、と考えた。すなわち Paracelsus はメルジーネという異界の精の存在を神の御業の一つとして解釈しようと試みたのである。彼によれば Elementarwesen は monstra すなわち悪魔や化け物とは別の存在で、人間と異なる点はもともと Seele を持たないことである。その一方で Paracelsus は、Gestirn（星辰）は父親から、Elemente（基本物質）は母親から子供へもたらされると述べている。(32) さらに、Gestirn には Kunst（技）と Sinne（分別）が、Elemente には Fleisch（肉体）と Blut（気質）が含まれているという。あらゆる病的な遺伝は、母親側からもたらされるものであるという。(33)

このような Paracelsus の解釈は、以上に見てきたメルジーネ物語の内容——メルジーネの子供たちに母方の異界性が引き継がれていること——と一致している。Paracelsus のメルジーネ論より一世紀前には既に、遺伝についてのこのような考え方が浸透していたということであろう。しかし、Elementarwesen に Seele が存在せず、人間との婚姻によって初めて Elementarwesen は神に救済されるという解釈は、著者の知る限り Paracelsus の著作で初めて記述されるものである。それ以前の中世のいくつかの著作においては、Elementarwesen がキリスト教と相容れず聖餐の儀に姿を消すなどといったモチーフは描かれているものの、異界の精とキリスト教が交合することは無い。Jeand'Arras、Couldrette および Thüring のメルジーネ物語によって初めて両者が交合し、異界の精がキリスト教徒として描かれた。それは、キリスト教側による民間信仰の取り込みの試みの現れであろう。そのような交合が可能であったのは、Elementarwesen に対する人々のもともとの認識が、古代の大地母神信仰の影響を残した神々しい存在であったからではないだろうか。正統派キリスト教以前の古代ヨーロッパでは大地母神が信仰されており、例えばクレタ島から出土した両手に毒蛇を持つ大地母神像や、エーゲ文明においては大母神であったギリシアの男神ヘルメ

ス等は、始原の両性具有者として豊饒のシンボルであった（詳細は注19を参照）。したがって、キリスト教側から見たElementarwesenは、悪霊的なもの、Seeleをもたない救われない運命の存在であったのであろうが、アニミズム的民間信仰側から見たElementarwesenは、キリスト教のイエスやマリアと同様に神々しさを備えた、身近でかつ畏敬の存在だったのではないだろうか。中世的心性におけるこの畏怖の念と親近性こそ、異界に属する両者の交合を可能にした原因だったのではないだろうか。

Paracelsusは、*Liber de Nymphis*で水の精をメルジーネと呼称し分析している一方で、同じく水の精という意味でウンディーネ(34)という名を案出した。ウンディーネには、メルジーネと比べると周知のように悪霊性が欠けており、その異界性を引き継ぐべき子供も生まれない。例えば、19世紀に書かれたFouqué『ウンディーネ物語』からは、人間よりも水の精への同情心が掻き立てられるのだが、このような共感は近代文学の産物ではない。15世紀に物語化されたメルジーネとその子供たちにはこれまで述べてきたように悪霊性が色濃く備わっているものの、メルジーネが夫に「蛇女」と罵られて嘆きの果てに人間界を去っていく場面は、ウンディーネが同様に夫に罵られて別れを告げる場面と共通して、人間ではなく異界の精への同情心が掻き立てられるような視点から描かれている。ここには、Elementarwesenが本来備えていた神々しい力、人間の運命を呪縛する超自然的な力への、中世的心性における畏敬の念と共感とが表現されている。異界の精にもまた魂を認められうる、という中世的心性レヴェルにおける共通理解の存在こそが、このような視点からの叙述を可能にしたものであると考えられるのである。Elementarwesenが Seeleを持たないという考え方は、メルジーネに魂を認めていた中世的共通理解から離反し、異界の精の世界秩序における位置づけをキリスト教的パラダイムのなかで再解釈しようとする試みの一つであった。

メルジーネの魂は、人間との婚姻で初めて宿るのではない。Paracelsusによって失われたのである。

Notes

(1) Friedrich de la Motte Fouqué: Undine. In: Undinenzauber. Geschichten und Gedichte von Nixen, Nymphen und anderen Wasserfrauen. Hrsg. von Frank Rainer Max. Einleitung von Eckart Kleßmann. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1991, S.143.

(2) フーケー（柴田治三郎訳）：水妖記（岩波文庫）1938、59-60 頁。

(3) メルジーネとは、中世フランスの貴族リュジニャン家の始祖として物語化された水の精の名前である。物語の内容は、人間であるポワティエのライモント伯と婚姻関係を結ぶが、夫がタブーを破って彼女の蛇女としての本来の姿を覗き見したため、人間界を去るというものである。1393 年ごろフランスの Jean d'Arras によって散文で物語化され、その後 1401 年ごろ Couldrette によって韻文化された。さらに、1456 年にスイスの Thüring von Ringoltingen によってドイツ語化され、民衆本として広まった。その後 H. Sachs (1556)および J. Ayrer (1598)によって演劇化され、J. F. W. Zachariae (1772) や L. Tieck (1800)によって翻案された。さらに、F. Grillparzer(1833)はメルジーネをモチーフにしオペラの台本化を行ない、Goethe はメルジーネをモチーフにしたメルヘン *Die neue Melusine* (1816) を著作した。In: Brockhaus. Die Enzyklopädie, Band 20, neu bearbeitete Auflage. Leipzig, Mannheim.

(4) Thüring von Ringoltingen: Melusine. Nach den Handschriften kritisch hrsg. von Karin Schneider. Text des späten Mittelalters hrsg. von Wolfgang Stammler und Ernst A. Phillippson mitbegründet von Arno Schirokauer. Heft 9. Berlin 1958. 文中のイタリック体および和訳は著者による。

(5) Ruh, Kurt: Die 'Melusine' des Thüring von Ringoltingen. In: Bayerische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-Historische Klasse. Sitzungsberichte/ Jahrgang 1985, Heft5. München 1985. S.19.

(6) Paracelsus: *Liber de Nymphis, Sylphis, Pygmaeis et Salamandris et de Caeteris Spiritibus Theophrast Hohenheimensis*. In: Theophrastus Paracelsus Werke. Band III Philosophische Schriften. Besorgt von Will-Erich Peuckert. Schwabe& Co. Verlag. Basel/Stuttgart 1967, S.462-498.

(7) この事実は、Thüring に遡ること約半世紀前、フランスで Jean d'Arras がはじめて蛇女の伝説にメリュジーヌという名を冠して物語化したことを考えると、非常に興味深い。メリュジーヌという名がどこからつけられたのか、様々に研究されているもののいまだ明らかではない。例えば、メリュジーヌの名がしばしば Mère Lusine と書かれていることから、語源論的に「出産を司る女神」「母」という意味だとする説や、蛇または魚の尾を持つという特徴を備えた女神の名、またはメ

リュジーヌの嫁いだリュジニャン家周辺の実在の人物の名と結びつける説などがある。しかしいずれにしても、Jean d'Arras 以前には、蛇女とメリュジーヌという名は結びついていなかった。Jean d'Arras 以後、Couldrette、Thüring と相次いでメリュジーヌの伝説を物語化し、民衆本として人気を博した。その結果として、リュジニャン家に嫁いだ蛇女の名メリュジーヌと、その蛇女の備える水の神話的性質、さらに水の精と人間との婚姻と破綻というモチーフが、フランスとドイツに広まったのである。メリュジーヌおよびメルジーネの名は、それ以前は水の精を現わすものではなく、メルジーネの物語化を機に、水の精と同一化したものと推測してよいだろう。メルジーネの物語化以前、12 世紀頃のヨーロッパに流布していた蛇女の伝説や、メリュジーヌの名前の由来、蛇女の備える水の神話的性質、水の精と人間との婚姻と破綻のモチーフについては、拙論「始祖譚としての『メリュジーヌ物語』」『研究年報』第 20 号（慶應義塾大学独文学研究室）2003 年、236-258 頁、および拙論「メリュジーヌ型説話における聖と俗—王朝起源神話としての『メリュジーヌ物語』—」『日本独文学会研究叢書 Kulturwissenschaft の課題と実践』第 16 号（黒子康弘編　日本独文学会）2003 年、33-52 頁を参照。

(8) Beelzebub また Bekzebub は、旧約聖書ではエクロンという町の神バアル・ゼブブ（Baal Zebub）のことである。本来 Baal Zebub は「崇高な王」という意味だったが、悪霊に貶められ、「ハエの王」という意味で嘲られた。新約聖書の「マルコによる福音書」3:22 によると、ベルゼブル（Beelzebul）はイエスに取り付いている悪霊とされている。「マタイによる福音書」12:24-27 によれば Beelzebul は悪霊の頭目で、パリサイ人たちは、イエスが Beelzebul の力を借りて下級の悪霊を追い払う力を身につけていると考えている。そのことから、Beelzebub はサタンと同じ意味で使われるようになった。民間信仰では、Beelzebub はしばしば呪文として用いられ、その姿は獣の毛皮をまとって描かれた。In: Brockhaus Enzyklopädie. in vierundzwanzig Bänden. Neunzehnte, völlig neu bearbeitete Auflage. Dritter Band. Red-Brn. F.A. Brockhaus Mannheim 1987 S.13.

(9) Paracelsus, *Liber de Nymphis*. S.489.

(10) C.G. Jung: Psychologie und Alchemie. Gesammelte Welke Bd.12, hrsg. Lilly Jung-Merker und Dr. Phil. E. Rüf, Walter, Düsseldorf, 1995

(11) anima mundi（アニマ・ムンディ＝宇宙魂）は、錬金術師たちが世界の魂を女性の霊魂とみなしてつけた語である。ロバート・フラッド『両宇宙誌＝大宇宙誌』に収められているドイツの版画家ヨハン・テーオ

ドール・ド・ブリの銅版画('Die weibliche Figur ist die von Gott geleitete <<anima mundi>>, die ihrerseits den Menschen führt.' Kupferstich von J.Th.de Bry aus. R. Fludd: Utriusque cosmi maioris scilicet et minoris metaphysica, physica atque technica historica. Oppenheim. 1617. pp.4 und 5.)(C.G. Jung: Psychologie und Alchemie. S.67. Abb.8 参照)によると、anima mundi は、右手は神霊界と鎖でつながっており、左手は魔界とつながっている人間の女性像である。女性の頭は星を散りばめた円で象徴されており、胸には星と月が描かれ、その星は地上とつながっている。以上のことから、人間とつながっている神霊界と魔界は人間の中に内在してもいることと、この女性が錬金術におけるメルクリウスであることを表現していると言える。(フレッド・ゲティングス（阿部秀典訳）：オカルトの図像学（青土社）1994 年、127-162 頁。)

(12) Jung, a.a.O.. S.352.

(13) M.エリアーデ（大室幹雄訳）：鍛冶師と錬金術師（せりか書房　エリアーデ著作集第 5 巻）1973 年、180-184 頁。及び M.エリアーデ（風間敏夫訳）：聖と俗（法政大学出版局）1969 年、178-191 頁。

(14) Paracelsus: a.a.O., S.473-474.

(15) メルクリウス（水銀）は、輝きと内的生命力を付与するものの本質を完全に体現する奇蹟の物質である。錬金術師がメルクリウスという言葉を使うとき、外的には水銀という具体物を意味するが、内的には物質の中に閉じ込められている天地創造の霊を意味している。それは「一にして完全なるもの」であり、メルクリウス的な存在は、一旦は二つに別れても再び結合し、「賢者の石」という形態をとって光り輝くと考えられている。Jung, a.a.O.. S.335-340.

(16) Jung, a.a.O.. S.350-352.

(17) C.G. Jung: Studien über alchemistische Vorstellungen. Gesammelte Werke Bd.13, hrsg. Lilly Jung-Merker und Dr. Phil. E. Rüf, Walter, Düsseldorf, 1995. S.162-163.

(18) 蛇とファロスとの結びつきは、古代の神話や祭式で広く認められる考え方である。古代ギリシアのディオニュソスの祭りではファロスの彫像が奉られるが、ディオニュソスは頭に蛇をつけた牡牛の姿で現れると考えられていた。旅行の神ヘルメスはファロスをつけた四角柱の石像として道路などに奉られたが、一方で錬金術のメルクリウスとしてのヘルメスは 2 匹の蛇が絡みつくカドケウス（杖）を手にして描かれている。日本古代の蛇信仰についても研究している民俗学者吉野裕子は、蛇のとぐろを巻いてその上に頭を立てている姿が攻撃的な姿勢であることから蛇とファロスとを関連付け、さらに蛇のエネルギッシュ

な交尾や脱皮による再生のイメージから豊穣を祈るシンボルになったと説明している。(吉野裕子：蛇　日本の蛇信仰（法政大学出版局）1979 年。）1895 年から 96 年にかけてのニューメキシコやアリゾナのプエブロ族居住地における蛇儀礼を報告した Aby Warburg もまた、文学や芸術における蛇表象の持つ象徴的な力を説明するものとして、蛇が「一年間で生と死を繰り返すこと」「脱皮しながら同じものにとどまること」「敏捷であること」「姿が見えにくいこと」を挙げ、その最後にただ一言'Phallus'と付記している。(Aby Warburg: Schlangenritual. Ein Reisebericht. Mit einem Nachwort von Ulrich Raulff. Kleine Kulturwissenschaftliche Bibliothek. Hrsg. Ulruch Raulff. Verlag Klaus Wagenbach. Berlin, 1988. S.59, Anm.4.) Warburg によると、蛇は、再生のシンボルである。(Aby Warburg, a. a. O., S.48.)

(19) ウロボロスで表象されるヘルメス・トリスメギストスの前身、ギリシアの男神ヘルメスは、エーゲ文明においては太母神の一部であり、始源の両性具有者であった。(バーバラ・ウォーカー（山下主一郎他訳）：『神話・伝承事典』(大修館書店）1988 年、318-321 頁。）それは既に述べたように知恵の神である。一方、バビロン王朝後期の陰刻入り宝石に描かれた神は、太陽を表す雄蛇と月を表す雌蛇にはさまれた両性具有の神であると考えられている。(Jung, a.a.O.. S.396. Abb.183.) 同様に、クレタで発掘された大地母神像の一つは両手に毒蛇を持っているが、豊満な乳房を持つこのクレタの大地母神像は、人間の力を超えた恐ろしい力を持った蛇を自由に操ることができるという、神としての力の誇示を表すとともに、性のエネルギー、再生、豊穣のシンボルであったと考えられている。(安田喜憲：蛇と十字架　東西の風土と宗教（人文書院）1994 年、26-28 頁。）そして先述したように、二匹の蛇に授乳させている裸婦像もまた、豊穣の大地母神テラの擬人化であると同時に、中世には快楽（luxuria）を意味するものであった。この場合、蛇は女神に快楽を与える男性を表象するものとみなされていたと考えられるだろう。さらに中世の錬金術では、互いに排斥しあう元素である硫黄と水銀との結合の試みによって、太陽と月、男と女等の両極性を合体すること、すなわち「大いなる作業」(magnus opus) を目指していた。この合体を、多くの写本が体の右半分が男、左半分が女の王の姿で描いているという。この王はレビス（Rebis）と呼ばれ、それはもともとラテン語で「二つの部分からなるもの」(res bina) という意味であった。そしてレビスの両側にある太陽の樹と月の樹の二つが世界樹を成し、全体で宇宙の両極性を表象しているという。(M. ルルカー（林捷訳）：鷲と蛇　シンボルとしての動物（法政大学出版

局）1996 年、212-213 頁。及び図 63。）また、Eliade によると、世界樹、世界軸、宇宙山といったこの種の宇宙的シンボリズムは、古代ローマから中東、さらに東南アジアにかけても見られる。古代都市は、宇宙樹が都市建設の中心となり、世界観を表していたのである。なかでも注目すべきはダヤク族の家屋のシンボリズムである。彼らは、世界は二つの対極原理に基づくと考えており、あらゆる家屋を象徴的に水蛇の上に建てた。その家屋は、至上神マハタラが坐す太古の山に相当する屋根と、生命の樹を表す傘を持つものであった。一方、インドネシアのあらゆる家屋は、儀礼的に聖別された「男」と「女」の区分を持ち、彼らの文化の宇宙的二元論を表象していた。（M.エリアーデ（楠正弘他訳）オカルティズム、魔術、文化流行（未来社）1978 年、43-51 頁。）

(20) メルクリウスは、男性的・精神的・霊的側面と女性的・肉体的・物質的側面とを合わせ持つ両性具有存在である。Jung, a.a.O.. S.395.

(21) Jung, Studien über alchemistische Vorstellungen. S.161-163.

(22) さらに、処女でありながら奇蹟的な力を持つラピス＝石（Lapis）を生み出すことから、この「メルクリウスの蛇」を、キリスト教の奇蹟の処女マリアとも同一視する文献が残っている。（Jung, Psychologie und Alchemie. S.484-485.）このことから、メリュジーヌが、蛇の形姿を持ちながら、奇蹟的な力を持つという関連でキリスト教のマリアと結び付けられる可能性も出てくる。この点に関しては紙面を改めて述べる予定である。

(23) Paracelsus: a.a.O., S.489-490.

(24) Paracelsus: a.a.O., S.480.

(25) Jung によると、Conrad Vecerius（コンラート・ヴェケリウス）は、Melyssina（メリュシナ＝メルジーネ）がセイレーンの住む海洋上のある島に由来するというメモを残しているが、（Urstisius: Scriptores Germaniae. In: Baring-Gould: Curious Myths of the Middle Ages II, London, 1868, p.218.（Jung: Studien über alchemistische Vorstellungen. S.198.より引用。））それは、Pomponius Mela（ポンポーニウス・メラ、紀元一世紀のローマの地理学者）に遡るらしい。Pomponius Mela はこの島を Sena（セーナ）と名付け、その住人を Senae（セーナエ）と呼んでいる。このセーナエは、嵐を引き起こし、変身し、不治の病を治し、未来を予知する能力を持つ海の妖精である。（Pomponius Mela: De situ orbis, III, cp6. In: W. Dinan: Monumenta historica celtica I, London, 1911, P.62.（Jung, Studien über alchemistische Vorstellungen. S.198.より引用。））このセーナエに由来する不可思議な力が、中世の錬金術師たちの手を

通して、メルクリウスの蛇（serpens mercurialis）としてのメルジーネに受け継がれた。錬金術のメルクリウスは、啓示をもたらす告知者（Daimones）であるとともに万能薬 (Panazee)、変身の能力を持つ海の老人（Proteus）等を表象する魔力のコードである。(Jung, Studien über alchemistische Vorstellungen. S.198.）つまり、このセーナエが錬金術師たちによってセイレーンと同一視され、同じ四大元素の「水」（Nymphen）に属する水の精であるメルジーネにセーナエ（及びセイレーン）の魔力が引き継がれたのである。しかし、古代のセイレーンのイメージは魚の尾ではなく鳥の尾を持つ海の妖精であったので、メルジーネの形象に関して言えば、半人半魚のイメージは古代のセイレーン表象に直接つながるものではない。とは言え、たとえ両者が異なった形姿を持ち、ならびに名前や叙事的契機に関する類似点が欠如しているにせよ、メルジーネとセイレーンの間には、セイレーンが水に属するものとして特徴付けられていた限りにおいて本質的な平行関係がある。鳥の形姿を持つ古代のセイレーンに関しても、それがその翼によって水だけではなく風と地にも属するものとして特徴付けられていた限りにおいて、風と地の性質をも持つメルジーネとの間に本質的な平行関係がある。

(26) Ruh, Kurt. a.a.O.

(27) Junk, Ulrike: "So Müssen Weiber Sein." Zur Analyse eines Deutungsmusters von Weiblichkeit am Beispiel der "Melusine" des Thüring von Ringoltingen. In: Der frauwen buoch. Versuche zu einer feministischen Mediävistik. Herg. Bennnewitz, Ingrid. Kümmerle Verlag Göppingen 1989. S.327-352.

(28) 異なる秩序の交合に関する以上の分析は、M. Schmitz-Emans の以下の論文にヒントを得たが、キリスト教的秩序と自然秩序との競合についての分析は著者による。Schmitz-Emans, Monika: Wasserfrauen und Elementargeister als poetologische Chiffren. In: Liebe und Gesellschaft. Hrsg. Pott, Hans-Georg. München 1997. S.181-229.

(29) Thünring von Ringoltingen: Melusine. a.a.O. S.87-88.

(30) Thünring von Ringoltingen: Melusine. a.a.O. S.90, 92.

(31) Scholz-Williams, Gerhild: Die Dritte Kreatur: Das Frauenbild in den Schriften von Paracelsus (1491-1543). In: Der frauwen buoch. Versuche zu einer feministischen Mediävistik. Hrsg. Ingrid Bennewitz. Kümmerle Verlag Göppingen 1989. S.353-371.

(32) Paracelsus: Philosophia sagax. S.79. In: Theophrastus Paracelsus Werke. Band III. a.a.O., S.37-406.

(33) Paracelsus: Opus Paramirum. S.170-171. In: Theophrastus Paracelsus Werke.

(34)

Band II. a.a.O., S.1-186.

(34) Undine はラテン語で Welle（波）という意味である。パラケルススは "Liber de Nymphis" の中で、人間との婚姻によって魂を得ることのできる女性の水の精として、Undine という名前を初めて使った。In: Brockhaus. Die Enzyklopädie. Band 20, neu bearbeitete Auflage. Leipzig, Mannheim.